巻頭言

森山新

2012 年に開始された国際学生フォーラムは今年で第 11 回目を数えた。今回は前回に引き続き新型コロナ拡大の影響で、協定校であるアメリカ、ヴァッサー大学での実施が不可能となり、COIL 事業の一貫という意味もあり、事前授業、フォーラムを含め全てオンラインで実施された。

COIL は Collaborative Online International Learning の略で、大学の世界展開力強化事業として実施されている。本学は上智大、静岡県立大とともに 2018 年に採択された。日米の大学がオンラインでの共同の学びを積極的に活用し、留学や国際交流など、様々な国際的な学びの促進につなげようとする事業である。今回は事前学習で、ZOOM を大学対大学の交流や事前準備、講演会を含む事前学習に、Facebook や LINE などの SNS を学生対学生の交流に活用した。

国境を超えて学生が交流し学ぶ国際共同学習は、短期間のセミナーやフォーラムとなることが多い。そこでは、短期間の直接交流で親睦を深め、その信頼の基盤の上に対話や討論を行い、成果をあげていくことになるが、そういったことは現実には容易なことではない。とりわけ今回は「平和教育を見つめ直す：第二次世界大戦と日米関係」という、日米間で異なる視点から捉えられてきたセンシティブなテーマが採択され、両者の意見や視点の対立を克服し、有効な結論を導き出すには、フォーラム実施以前から ZOOM や SNS を積極的に活用し、オンラインで交流や親睦を深め、学び合う場を持つようにすることが必要である。それは、短期研修の短所を克服、長期化、日常化し、より大きな成果を上げることにつながる。その意味で今回、COIL 事業として全面オンラインで実施されたフォーラムの開催は、国境を越えた対話の場を日常的に提供する可能性を提示し、国際交流の可能性をこれまで以上に高めてくれたものと思っている。

また、通常の授業とは異なり、発表の事前準備、事前学習は、学生自らが相互に連絡を取り合い、オンライン上で会し、それぞれが自身に任された担当を主体的にこなしていかなければならない。しかもそれらは国境、言語の壁を越え、時差や学時歴の違いを克服し、実施しなければならない。その意味で学生の自律性、主体性が育まれ、グローバルなリーダーシップ育成につながる。

10 月、本学とヴァッサー大で説明会を開催し参加者を募集、その後月 1 回のペースでオンライン合同授業を行い、フォーラムの事前準備、事前学習を行った。2〜3 月に実施されたフォーラム本番では、日米合同の 4 つのグループがそれぞれのテーマで発表を行ったが、その際には複言語主義の立場から互いに相手の言語（英語または日本語）を用いて発表した。どの学生の発表にも共通しているのは、第二次世界大戦というセンシティブなテーマを、自国中心の視点を保留、相手の意見に耳を傾け、対話する中で、超国家的な視点

から答えを導き出しており、そのような困難を伴うプロセスをこなす中で、超国家的な視点やアイデンティティ、さらにはリーダーシップを育んだということであり、各自が世界市民として成長していた。まさしく間文化的シティズンシップ教育の場としての国際学生フォーラムにふさわしい姿であった。

基調講演で私は、まず今回のテーマ「平和教育を見つめ直す：第二次世界大戦と日米関係」の趣旨説明を行った。さきの第二次世界大戦（太平洋戦争）は日米の国家的利害対立により引き起こされたものであり、平和教育には国家的な利害や視点の対立を克服する必要がある。しかし日米で行われている平和教育を見ると、日本では原爆、米国では真珠湾攻撃が強調され、それぞれが自国を被害者として描いており、真に国家的な視点を克服して行われているとは言い難い。そして、それを克服していくために、今回、「民主的文化のための能力（Competences for Democratic Culture)」を理論的枠組みとして採択したことを説明し、その内容を改めて紹介した。「民主的文化のための能力」とは利害対立を抱える異なる他者との対話には、価値づけ、態度、スキル、知識と理解に関する 20 の能力の育成が重要であるという内容で、本フォーラムの文脈に合わせ、参加者がどのような能力を発揮する必要があるかを説明した。さらに高等教育機関で学ぶ大学生の使命を語った。Higher Education: A Critical Business の著者であるロナルド・バーネット（Ronald Barnett）によれば、高等教育とは、既存の知識、自己、世界をクリティカルに見つめ、問題を解決し、よりよい知識、自己、世界を構築する歩みの先頭に立つべき者の集まりである。日米の大学、日米のリベラルアーツカレッジを代表するヴァッサーと本学の学生により、そのような大学人のミッションにふさわしい発表と実践がなされたことは、このフォーラムを立ち上げ、長年にわたり続けてきた者としてもとても喜ばしいことであった。

世界はまさに今、ウクライナとロシアの対立に象徴されるように、第二次世界大戦以来の深刻な問題に直面している。ここで学んだ学生たちが、この深刻な問題を、自身が先頭に立ち解決すべきである、という意識に目覚め、世界がよりよく、ともに過ごせるようになるために立ち上がり、行動に移す。そしてそうした体験を踏まえ、さらにいっそう世界市民として成長していってくれることを祈ってやまない。

最後に、ヴァッサー大学の丘先生、土屋先生、講演を行なってくださった日米の先生方、そしてフォーラムの成功にご尽力くださった両校の国際業務関係者の皆様に心から感謝を申し上げたい。